

いちおし!  
探訪記 54

人々の生活を支える清流・長良川。郡上市の源流域から岐阜市などの都市部を経て、伊勢湾に注ぐ。今回は、小学5、6年生が、海と川と山のつながりを学ぶバスツアー「海なし岐阜で海を学ぼう隊」(海と日本プロジェクトin岐阜県実行委員会主催)に同行し、長良川の源流から伊勢湾までを巡りながら、山や海が抱える現状を体験したり、自然と触れ合ったりした。

(取材/野口晃一郎)

※海と日本プロジェクトin岐阜県  
県や岐阜市、岐阜新聞社、岐阜放送などでつくる実行委が中心となり、海への関心を高める取り組みを行っている。



山づくりの大切さについて語る育林家の山川弘保さん



若木に日光を当てるための草刈りを体験する子どもたち



鮎が遡上する北限とされる郡上市白鳥町の長良川



鮮やかなオレンジ色のあぶらビシが特徴の天然鮎(下)



渓流釣り名人の白滝治郎さんと友釣りを体験



高松干潟の海岸線にはペットボトルなどの海洋プラスチックごみが打ち上げられていた



高松干潟に生息するカニ

海と川と山をつなぐ長良川の旅



海と川と山のつながりに関して学んだ小学生ら

源流の森で保育しながら、清流の美しさを維持

バスツアーで最初に訪れたのは、長良川の源流域にあたる郡上市高鷲町鮎立の山林。医師であり、約170㉿の山林を管理する「育林家」として活動している山川弘保さんから山づくりの取り組みについて話を聞いた。山川さんは森の働きについて、①水をつくる②空気をつくる③エネルギーをつくる④環境をつくるという4点を挙げた。その上で、「山の保育」の必要性を強調する。若木に日光を当てるために、草刈りを行ったり、間伐したり、森を育てる取り組みを続けている。また、約30㉿のヒノキの苗を植え、持続可能な山づくりを継承している。「山には大きな木も小さな木もあり、アカマツやヒノキ、スギなどさまざまな種類の木々が生息する。しっかり森を育て、長良川流域に

暮らす人がきれいな水を使えるようにしていく責務を感じています」と力を込めて語ってくれた。



約30㉿のヒノキの苗を植樹した

日本の伝統漁法「鮎の友釣り」

次に訪れたのは郡上市白鳥町の「清流長良川あゆパーク」。白鳥町は長良川の源流域から車で20分、伊勢湾から鮎が遡上できる北限といわれている。同施設は、世界農業遺産「清流長良川の鮎」を国内外へ情報発信する拠点として昨年6月にオープン。鮎のつかみ取りや塩焼きを体験できる広場を備え、長良川沿いにある木造平屋の「里川あゆハウス」は、臨場感ある映像を観ながら、「清流長良川の鮎」の特徴や一生などを学ぶことができる施設だ。

また、ここでは鮎の友釣りを体験できるのもうれし。今回は、郡上漁業協同組合代表理事副組合長で渓流釣り名人として知られる白滝治郎さんから指

導を受け、友釣りに挑戦した。友釣りは日本で生まれた伝統的な漁法の一つで、縄張りを守る鮎の習性を利用して行う漁法だそうだ。生きた鮎(おとり鮎)に掛け針をつけて縄張りに誘導し、テリトリーを荒らされたと思って挑んでくる鮎を釣り上げる。「普通の釣りでは、釣り人の意思が影響するが、友釣りはおとり鮎の気持ちになって元気に泳がせることがポイント。伝統漁法を多くの人に知ってもらい、後世につないでいきたい」と白滝さん。

「あゆパーク」では、魚類の増殖や水域環境の保全・復元に関する調査研究などを行っている県水産研究所の主任専門研究員の森美津雄さんから、鮎の生育と一生について話を聞いた。

森さんによると、鮎が産卵する場所は、長良川の場合、中下流域の岐阜市。産卵場所の条件は、川底が小石となっている流れのある瀬。石と石の隙間に水が流れ、卵に新鮮な水が供給される環境が必要という。鮎の産卵は、1尾の雌に多くの雄が一緒になって産卵するのが特徴。卵の大きさは約1㉿で、石にくっつくため、ねばねばしている。1尾の雌が生む卵の数は、100㉿の鮎で5~6万粒。産卵から約2週間て生まれた仔魚(しぎよ)は、川の流れて海に下るそうだ。稚鮎は冬から春にかけて、水温が高くエサの動物プランクトンが豊富で大型の魚が少ない、海の波打ち際で群れで過ごす。そして水温が高くなる春になると今度は川を遡り、初夏には若鮎となって長良川に勇姿を見せるのだという。

海洋プラスチックごみが打ち上げられる伊勢湾

最後に訪れたのは、稚鮎が過ごす伊勢湾の高松干潟(三重県川越町)。ここでは、ボランティア団体「高松干潟を守ろう会」代表の水谷いずみさんと共に、干潟に生息するアシハラガニなどさまざまな種類のカニなどを観察した。海岸には残念ながら、近年問題となっているペットボトルなどの海洋プラスチックごみが大量に打ち上げられていた。稀少生物が脅かされているという現実を目の当たりにし、海と人との関わり、海を守ることの大切さを切実に感じた。



「高松干潟を守ろう会」の案内で干潟の生物を観察する小学生ら